

## 国文研ニュース

No.66 WINTER 2025



『東京名勝画詞』

## 目次

## ●メッセージ

テキスト・データベースの威力 .....	川平 敏文	2
----------------------	-------	---

## ●エッセイ

『源氏物語』古注釈をめぐって .....	陣野 英則	3
----------------------	-------	---

## ●書評

国文学研究資料館編『アーカイブズ学入門』 .....	針谷 武志	5
----------------------------	-------	---

## ●トピックス

展示を鑑賞して

「岡山の至宝——正宗文庫の輝き——」 .....	長福 香菜	6、7
「松野文庫の贈りもの」		
「賀茂季鷹と古典の「知」 京都市歴史資料館寄託山本家資料展」 .....	大山 和哉	8、9
「枕草子と春曙文庫——田中重太郎旧蔵書資料を中心に」		
日本漢詩文の場とかたち——日本古典籍セミナー北京2024—— .....	廖 榮發	10
古典籍講習会参加の記 .....	水嶋 彩乃	11
こども霞が関見学デー .....	松原 哲子	11
国文学研究資料館・富岡町協定締結1周年		
企画展「江戸の商いとくらし」・講演会「和歌と境界—— <sup>なこそ</sup> 勿来の関のことなど——」 .....	門馬 健	12
2024年度アーカイブズ・カレッジ(短期コース)・		
シンポジウム「地域資料の所在把握・救出・自治体史編纂・活用」 .....	西村慎太郎	12
第17回日本古典文学学術賞受賞者発表 .....	社会連携係	13
第17回日本古典文学学術賞選考講評 .....	入口 敦志	13
令和6年度(2024年度)「古典の日」講演会 .....	河田 翔子	14
総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況 ..Escalona Echaniz Jose Manuel、瀧山 嵐、齋藤真麻理		15
データ駆動による課題解決型人文学の創成～データ基盤の構築・活用による次世代型人文学研究の開拓～ KICKOFF SYMPOSIUM		
「AI×人文学——データ駆動による未来形成——」 .....	入口 敦志	16

## テキスト・データベースの威力

川平 敏文（国文学研究資料館運営委員、九州大学大学院教授）

九州の地に、国文学研究資料館分館の設立を——。故・中野三敏九州大学名誉教授が国文学研究資料館（以下「国文研」）の外部委員であったとき、何度も口になされていた要望であったと聞く。国文研は全国の研究者を動員して、地方の資料を調査・撮影しているが、それらのデータは全部東京の国文研に集約され、地方は恩恵を受けることはない。不公平ではないか。そこで九州にも紙焼写真・マイクロフィルムを閲覧できる施設をつくるべきだ、というのであった。

まだインターネットが十分に普及せず、現在の「国書データベース」のようなものが、まったくの夢物語として語られていた時代の話である。それがこの10年で、この要望は実質的に、ほぼ実現された。ただに九州のみならず、世界中の誰もが国文研にアクセスし、30万点の諸本の画像を閲覧できるようになったからである。その間の国文研を中心とした方々のご尽力に、心から敬意と感謝を申し上げたい。

ところで国文研では、次なる10年間の事業計画のなかで、27万点にのぼるテキスト・データベース（以下「テキストDB」）の構築・公開を目指しているという<sup>(\*)</sup>。これについて以下、私の日ごろ考えているところを話してみたい。

現今、日本古典のテキストDBとしては、「ジャパンナレッジ」収録の「新編日本古典文学全集」「群書類従（正・続・続々）」、「日本文学 web 図書館」収録の「新編国歌大観」「古典俳文学大系」などが挙げられる。収録書目数は、5～6千点くらいであろう。ただし私の専門とする近世期の文献については少ない。

いっぽう中国学関連のテキストDBは、文淵閣「四庫全書」をはじめ、「中国經典古籍庫」「中国哲学書電子化計画」「漢籍リポジトリ」などさまざまあり、収録書目数も桁違いで、重複もあろうが、「漢籍リポジトリ」だけでも2万点近い。これまで、漢籍由来の典拠や用例探しに難渋していた作業が、ほぼ一瞬にして解決することもしばしばで、もはや研究に欠かせないインフラとなっている。日本古典においても、これまでになく規模の巨大なテキストDBが整備されれば、研究の精度・スピードは飛躍的に上がってくるだろう。

もっとも現段階においては、上にいう27万点というテキストが、OCRによって機械判読されたものであり、完璧な精度を誇るものではないことには注意が必要である。しかしそれでも、通常の仮名草子程度の版本であれば、8～9割の精度で読み取れるのであって、使い物にならないレベルではない。また、たった5～6千点の文献のなかから用例を探すより、27万点の文献のなかから探す方が、ヒットする確率は40倍以上も高くなる。たしかに不完全なテキストゆえ、取りこぼしもあろうが、得られるもののメリットの方が大きいのである。その意味で、精度が「そこそこ」のテキストDBでも、十分な威力がある。

いっぽう、研究者の校正を経た良質のテキストDBも、並行して作成していく必要があるだろう。これについて国文研は、10年間で3千点を作成・公開することを目指すという<sup>(\*)</sup>。なかなか高い志だ。この目標を達成するためには、①どのような文献を優先的に作成するのか、②どのような書式（フォーマット）で翻刻するのか、③誰がその作業に従事するのか、などを決定する委員会を立ち上げ、しっかりと実現可能性を探っていくことが必要になるだろう。これはかなりの難題であるが、ぜひとも推進していただきたいと思う。

さいごに、このうち③について鄙見を述べておこう。実際の作業としては、学生アルバイトだけではなく、定年により現役を退いた研究者の方々に協力を仰ぐという方法が有効ではなかろうか。もちろん定年になったからといって、それほど暇になるわけではないだろうから、ボランティアではなく、相応の謝金を支給して、責任をもって作業に従事していただく。そのための予算措置もあわせて考えなければならないが、質の高いテキストDBを構築するためには必要な経費と言わねばならないだろう。

\*文部科学省・大規模学術フロンティア促進事業

「データ駆動による課題解決型人文学の創成」

[https://www.mext.go.jp/content/20240628-mxt\\_gakkikan-000035679\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240628-mxt_gakkikan-000035679_1.pdf)



## 『源氏物語』古注釈をめぐって

陣野 英則（国文学研究資料館共同研究委員会委員、早稲田大学文学学術院教授）

### ◆『源氏物語』古注釈の研究会、その事始め

今から四半世紀ほど前、つまり前世紀が終わるころ、出身大学の非常勤講師であった私は、後輩の方たちから、『異本紫明抄』を読む研究会を始めようとしているので、よかったら一緒にやりませんか」と声をかけられた。それまで、古注釈への関心はあったものの、未翻刻の資料にとりくむような活動など一切していなかったもので、未知なる古注の世界へ踏み込んでみようという気持ちで参加することにした。当時の研究指導担当の田中隆昭先生に顧問格として関わっていただき、博士後期課程在籍の岡部明日香、栗山元子、新美哲彦、横溝博の各氏（五十音順）を中心メンバーとする研究会がスタートする。この方たちは、それぞれが自身の研究テーマと向き合いつつ、のちに『源氏物語』の古注釈あるいは受容の研究にも本格的にとりくんでゆかれた。一方の私といえば、わずかばかりの古注釈関係の論考をまとめた程度で、未翻刻の重要な文献としてとりあげることにした陽明文庫蔵『長珊聞書』の翻刻などは、私が協力者の皆さんを束ねる立場に就いたがゆえに、いつまで経っても翻刻書の刊行に至らないという事態に陥ってしまった。忸怩たる思いをいだきつつけている（関係の皆さんに、この場を借りて深くおわび申し上げます）。

さて、最初にとりくんだ『異本紫明抄』であるが、この書名は、近年ほとんど用いられていない。題簽と今川範政による奥書には「紫明抄」とあるものの、その内容は『紫明抄』とは到底いいがたく、『紫明抄』の異本の類いでもない。そうしたこともふまえた上で、栗山元子氏が翻刻と解題を担当された『源氏物語古註釈叢刊 第一巻』（武蔵野書院、2009年）、ならびに新美哲彦氏が編集と解題を担当された『正宗敦夫収集善本叢書 第Ⅰ期第一巻』（同、2010年）では、いずれも内題に記されている「光源氏物語抄」を書名として採っている。このことが、呼び名を変える決定的な契機になったといえよう。さらに重要なのは、この注釈書の中身である。それまでに稲賀敬二、堤康夫両氏の研究などがあったものの、何しろ栗山氏の翻刻が出版されるまでは、全五帖のうちの第一帖の翻刻がなかったこともあって、『源氏物語』研究者でさえあまり参看していない様子であった。研究会では、その第一帖の翻刻にとりくんだ。すると、『紫明抄』、『河海抄』のように将軍へ献上するために整えられた注釈書とはまるで異なる、ゆたかな世界を呈しているこ

とに、メンバーはしばしば興奮した。世尊寺伊行、藤原定家、源親行、素寂といった『源氏物語』古注釈ではおなじみの人たちに加え、西門、清原教隆、また編者（不明）の注記とみられる「今案」等々、さまざまな注釈者たちの説が集められ、また注釈者どうしの対立も鮮明に示されたりしているのであった。

### ◆「早稲田大学古注の会」と名のつてみたものの……

この研究会は、私が出身大学の専任となった上、2004年度からは大学院の研究指導担当者にもなったことから、あくまでも事務的な意味での世話役の立場で私が関わりつづけ、今日に至っている。『光源氏物語抄』のあとは、肥前島原松平文庫蔵『源注』の翻刻にとりくんだ。これは、一条兼良から宗祇、牡丹花肖柏、三条西実隆へと連なる室町後期の注釈の継承と展開を精密にとらえる上で、きわめて重要な資料であった。最初に注目されたのは横溝博氏で、彼が中心となって翻刻が進められた。大学院に進学してきた人たちもメンバーに加わり、横溝氏と私の共編になる『平安文学の古注釈と受容 第一集』（武蔵野書院、2008年）にその翻刻を掲載する。解題はもちろん横溝氏が担当された。さらに彼は、肖柏と実隆らの関わり、また『弄花抄』をめぐる価値ある研究論文を幾篇もまとめている。

なお、『平安文学の古注釈と受容』は第三集まで刊行した。研究会メンバーからは、このシリーズにさまざまな論考を提供してもらった。今は亡き岡部明日香氏は、成島築山『紫史吟評』などの「漢訳源氏物語」作品も積極的に研究してくださった。貴重な成果であった。

ところで、上記『源注』の翻刻を掲載するにあたり、翻刻担当の末尾に「早稲田大学古注の会」なる団体名を添えている。しかし、この名は（よい意味で）実態をあらわさなくなった。というのも、早稲田の大学院生中心の研究会として出発しながらも、やがて他大学の院生からベテランまで、次々と参加して下さるようになったからである。早稲田関係では早くから河野貴美子、緑川真知子両氏などが参加されたが、たとえば小川陽子、河添房江、齊藤鉄也、坂本清恵、宮川葉子の各氏のように錚々たる方々が参加してくださっている。

他方において、国文学研究資料館の関係では、AIのくずし字認識の開発者として世界中から注目されているカ

ラーヌワット・タリン氏が、古注の会の活動にもっとも熱心にとりくんだメンバーの一人であり、研究会での翻刻、発表などを活かして、中世の『源氏物語』古注釈の研究で博士学位を取得された。また、スタンフォード大学の博士候補生として早稲田にこられたノット・ジェフリー氏は、宗祇をはじめとする連歌師たちの『源氏物語』研究の先見性と重要性とを私に教えてくださった。現在は、古注の会の活動を牽引する存在として、さらに活躍されている。

上記の『源注』の翻刻以降も、早稲田大学図書館九曜文庫蔵の未翻刻資料にとりくんだり、玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』(角川書店、1968年)などの本文とは相当に異なる『紫明抄』、『河海抄』の翻刻をつづけてみたりした。ただし、私がそうした翻刻の成果をうまく束ねて公にすることができないままになっている。これまた申し訳ない限りである。

以上、多くの方たちのお名まえを挙げつつ、古注釈の研究会について紹介してきた。私は、一緒に研究してゆくための「場」を提供しつつ、事務的な対応をつづけたという程度の関わり方しかできていない。とはいえ、およそ四半世紀にわたり関わってきたことから、古注釈の特徴、魅力、留意すべき点などについて、少しばかりは知見を得るようになったかもしれない。そして、古注釈が示す突拍子もないような説をよくよく吟味してみると、現代の諸注釈すべての書き換えを要するのではないかとおもわれるような例にもたまには出会う。最後に、そうした事例を示してみよう。なお、それは古注釈の研究会ではなくて、最近の大学院修士課程の演習のさなかに出くわしたものである。

### ◆三條西実枝の卓越した注記

『源氏物語』「若菜 下」巻の終盤で、光源氏(六条の院)に女三の宮との密通を知られてしまった柏木は、光源氏からの痛烈な皮肉いちべつと一瞥いちべつに恐れおののき、病に臥した。息子が心配でならない父致仕大臣と母北の方は、女二の宮(落葉の宮)のもとにいた柏木を引き取ろうとするが、それに対して女二の宮の母一条御息所いちじょうのみやすんどころは、夫婦の間柄であれば「とあるをりもかゝるをりも、はなれたまはぬこそそれいのことなれ」(『源氏物語大成 校異篇』p.1218)などと柏木に伝える。ここでは、その御息所の発言の末尾部分以降を引用してみる。

「……しばしこゝにて、かくてこゝろみたまへ」と、御かたはらに御きちやうばかりをへだてゝみたてまつり給ふ、ことはりや。「かずならぬ身にて、およびがたき御なからひになまじひにゆるされたてまつりてさぶらふしるしには、ながく世に侍りて、かひなき身のほども、すこしひとゝひとしくなるけぢめをもや御覧ぜらるゝ、とこそおもう給へつれ、…〔中略〕…えゆきやるまじく思う給へらるゝ」など、かたみになき給ひて、とみにもえわたり給はねば、……

(同、p.1219)

問題は下線部「ことはりや」である。現代の諸注釈はいずれも、ここから柏木の会話文と解している。私も、岩波文庫『源氏物語(五)』(2019年)の編集協力者としてこの巻を担当した際、何の疑問もいわずに、「ことはりや」以下を柏木の会話文ととらえた。室町後期の古注釈でも、『弄花抄』の「柏木返事」とする説が多く踏襲される。しかし、『萬水一露』の能登永閑説の と えい かん、『岷江入楚』の「私」説みん ぎょう に つ そは「柏木の心」と解している。また、『岷江入楚』が引く三条西実枝の説では、「柏木の心」とした上で、「又草子地敷」との別解も示される(以上、演習での後藤柊斗しゅう と氏の発表資料を参考にしつつ整理)。なお、『長珊聞書』、『寛勝院抄』などをも確認してみた。「草子地」とする説は、ほかに見当たらないようである。

結論からいえば、柏木の発言とするのは無理だと考える。なぜなら、引用文の中略箇所もふくめ、一条御息所に対する柏木の会話文では、謙譲と丁寧の表現が過剰なまでに用いられているからである。そうした態度の柏木が、「ことわりや」というぶっきらぼうな応答をいきなり御息所にむけるとはおもえないのだ。では、柏木の心中の言葉か。それではどうも落ち着かないだろう。こうした叙述について、今の私は「間主観的 intersubjective」というべき恰好の例だともっている。語り手と柏木とが分離していないのである。しかし、岩波文庫にとりくんだときにはまったく気づかなかった。実枝の「草子地敷」という独自の説にふれ、ようやくそう考えるに至る。実枝の注記には、これまでもたびたびうならされてきた。この箇所も、長い注釈史において、ただ一人、実枝だけがわかっていたということではないか。

## 国文学研究資料館編『アーカイブズ学入門』

針谷 武志（別府大学教授）

はしがきに、「少子化の進行」「地域の衰退」に対応して民間アーカイブズを受け継ぐ人材の必要性和、大学でのアーカイブズ授業の教科書としての役割を期待することを謳っているが、大学院でなく大学とする。6日間のアーカイブズ・カレッジ短期コースの内容をもとにして、管理論を重視したとある。大学授業だったら学生にとり難易度はやや高め、趣旨からも、教養科目ではなく専門科目、配当年次は2年か3年生くらいか。

内容は第1講から第12講まであり、第1講は総論（概論）、第2講は資源論で、第3講から第11講は管理論、第10講から第12講が実践例となる。各講の題名は割愛した。

第1講（渡辺浩一）ではアーカイブズの初期定義から、現在に適合する定義への移行を解説する部分は判りやすい。記録連続体（レコード・コンティニウム）論を基礎とするが、多重円の図を載せることなく、上手に説明されている。また専門職や大学院レベルでの養成について触れて次へ誘っている。第2講（藤實久美子）はアーカイブズ資源論で、言葉の意味が語られる。記録史料からアーカイブズへの変化は活用の意味を重視し、認識論から資源論への変化もアーキビスト倫理綱領や編制・記述方式に応じるためと示される。

第3講（中村崇高）のアーカイブズ・レコード・マネジメント論は、まず「レコード・マネジメント」の前に「アーカイブズ」を冠したのは例をみない。レコード（マネジャー）とアーカイブズ（アーキビスト）の二分論でなく、両者を一体とするレコードキーピング（キーパー）の考え方の表現かと思われる。レコード・コンティニウム概念の多重円の図が示される。この図の説明は学生に理解して貰うのに苦労するのだが、類書のなかでは本書が一番判りやすい。一方で日本の現場ではこの理論ではなく、従来の単線的ライフサイクルモデルのレコード・マネジメントが主流であることも認めている。後半の日本の官公庁、地方自治体、企業についての記述で具体的に理解できる。

第4講（太田尚宏）では民間アーカイブズのコントロールのあり方を提起している。所在確認調査から、現状記録や内容（詳細）調査などについて述べ、現地で内容調査を完成させずとも、写真撮影による追補でよいという提言は、現地負担（所蔵側と調査側）を減らしながら目的達成できる。民間アーカイブズつまり私有財産を公費で保存するための論理として、海外事例を参考に、公開（つまりは共有）すれば公費による保護もゆるさるという考え方を提示している。社会に浸透を願いたい価値観であろう。

第5講（橋本陽）は電子アーカイブズの情報コントロー

ルについてである。現段階における電子記録の長期保存の到達点を整理されて、有益である。技術のみに走らず（むしろ捨象したか）、まさに入門にふさわしい難易度と感ぜられた。とくにデジタル化を業務効率の点のみを過大視して信用価値のある記録として保存することの重要性を軽視しがちな世相に警鐘を鳴らしている点が良い。ただ今後数十年後も通じるのか見通しが欲しい。

第6講（西村慎太郎）は、記述編成のISAD (G) 原則の説明と具体的な応用編成の例をあげている。シリーズは必ずしも組織でなく機能がよい場合があることや、少数でも編成すると特質が把握できることの指摘がある。「アーカイブズ学のためのアーカイブズにならないように」の語りは、本講を熟読して意味を会得してもらうのがよいだろう。

第7講（菊谷英司）は自然科学系のアーカイブズについてだが、実験ノートが強調された不正事件はまだ記憶に残っている（あえて固有名詞は記されていないが）。学生にはもう少し補う必要があろう。また個々の研究分野の学問的価値のほかに、アーカイブズの価値は多様だと思う。

第8講（金山正子）は保存修復についてである。必須の内容である。第9講（加藤聖文）は「文化財」から「公共財」へとの副題が内容を表している。公共財にならないと残らないし、アクセスが重要な論点なのだが、安易なMLA（博物館・図書館・文書館）連携は文書館の存在意義を失わせかねないなどの現実的な指摘は有益だ。プライバシーの議論なども、本質的でなく表面的な日本の状況を厳しく批判している。

第10講（蓮沼素子）は地域の公的アーカイブズとアーキビストの役割を論じる。保存や公開、研修、被災レスキューなどのほか、小中高大との教育連携、生涯学習を挙げている点を評価したい。第11講（関根豊）では都道府県のアーカイブズ機関として神奈川県立公文書館、第12講（河野未央）では市区町村の機関として「あまがさきアーカイブズ」を取り上げて、管理と利用について詳述している。学生に両者を比較させて、包括的自治体と基礎的自治体のアーカイブズの違いについて考えさせるのもよいように思えた。





## 展示を鑑賞して「岡山の至宝 — 正宗文庫の輝き —」

2024年9月5日（木）から10月13日（日）まで、岡山県立博物館でテーマ展「岡山の至宝—正宗文庫の輝き—」が開催され、昨年に引き続き一般財団法人正宗文庫所蔵の資料が展示されました。正宗文庫は、古典籍や文書類の蒐集と保存・活用を目的に、歌人・国学者であった正宗敦夫（しやうしゆ とうぶ）（1881-1958）によって設立されました。膨大な蔵書の中から、今回は「至宝」と呼ぶべき貴重な古典籍類が4部に分かって紹介されました。

第1部「正宗敦夫顕彰—短歌・出版・古典研究—」では、師から添削を受けた敦夫の詠草や岡山の歌人たちの伝記等を調査研究したノート、また稀覯本を出版するべく設立した歌文珍書保存会の刊行書目等が展示されました。創作と研究に励んだ敦夫は錚々たる文人らと交流を持ち、指導も受けていました。展示された文人たちの自筆資料からはその証がうかがえ、文学史的にも高い価値を有しています。

第2部「歴史史料にみる江戸時代の岡山」では、岡山藩士石丸定良や土肥経平による郷土研究の著作、岡山の郷土史家塚本吉彦の旧蔵本等が展示されました。吉備史談会を通じて塚本と交流のあった敦夫は塚本の蔵書群に触れる機会に恵まれ、その経験が敦夫の蒐書活動を支えています。郷土と書物を愛した人々の遺産や活動を引き継ぐことは敦夫に与えられた使命だったのかもしれません。

第3部「豊饒なる備前岡山文化」では、熊沢蕃山の稀少な自筆資料や、岡山俳壇の繁栄を伝える俳書、岡山の桂園派歌人の日記等が展示されました。城下町岡山の地で醸成された学問的文化的風土の中で育まれた文



芸の発展は特筆すべきことで、その息吹は今も失われていません。

第4部「さまざまな優品」では、現存最古の古活字版『法華玄義序』、紋章学者沼田頼輔旧蔵本「本寺〔西大寺〕本尊縁起」や岡山出身の竹久夢二自筆日記等が展示されました。蒐書家としての確かな鑑定眼はもちろんですが、優品・稀品を引き寄せる運も敦夫は持ち合わせていたように思います。

このように敦夫は郷土岡山の歴史・文化を伝える資料や同郷人の著作を意識的かつ積極的に蒐集していたことが知られます。それがまさに「岡山の至宝」です。

生前敦夫が文庫の活動として掲げていたのが地域への貢献・還元でした。今回、私は国文学研究資料館の特定研究（地域資料）「正宗文庫の研究」（2022～2024年度）の共同研究員として展示に携わらせていただきました。会期中に開催されたセミナーやギャラリートークは好評を博し、地域の方々を中心に多数の参加がありました。2年連続の展示を通して、多くの方々に貴重な資料を共有する機会をいただけたことは、敦夫が目指した文庫の姿に一步近づけたのではないかと思います。同時に、希少性及び歴史的価値の高い資料を保存するだけでなく、いかに活用していくかという課題も改めて示されたように思います。

（和歌山大学教育学部准教授 長福 香菜）

## 展示を鑑賞して「松野文庫の贈りもの」

2024年9月5日(木)から10月22日(火)まで、国文学研究資料館で企画展示「松野文庫の贈りもの」が開催されました。国文研の元館長で、中世近世和歌の研究者であった松野陽一(1935-2018)の蒐集したコレクション(全485点)が松野陽一文庫として現在国文研に所蔵されています。今回の展示では全体を4部に分かって、文庫の全貌と特色が紹介されました。

第1部「<sup>ふじのわらのしゆんぎ</sup>藤原俊成とその周辺」では、蔵書の核をなす歌書の中でも特に俊成奉勅撰の勅撰和歌集『<sup>せんざい</sup>千載和歌集』のコレクションが圧巻でした。写本と版本あわせて計27点に及ぶ伝本の中から、松野文庫内でも最古の写本とされる大島雅太郎旧蔵の三冊本をはじめとする8点を厳選し展示していました。いずれも善本で、まさに壮観と言わざるを得ない陳列でした。

第2部「江戸の武家歌壇」では、江戸堂上派<sup>とうしやうば</sup>を代表する<sup>こうべん</sup>亨弁や石野広通<sup>いしのひろみち</sup>の書日が展示されました。従来近世和歌史においては賀茂真淵<sup>かものまづみ</sup>ら古学派のみが言及され、江戸堂上派武家歌壇はほとんど問題にされてきませんでした。ところが、今回陳列された広通撰による江戸堂上派歌人の私撰集『<sup>かかんしゆう</sup>霞関集』初撰本・再撰本で確認できる古学派の排除や末尾付載の「作者目録」からは、当時の歌壇状況や江戸堂上派の系譜の実態をうかがうことができます。通説を踏襲せず、当時の歌壇を虚心に見ることの大切さを実感しました。

第3部「絵本の楽しみ」では、50点以上の絵本の中から、西川祐信画『絵本小倉山』、中島丹次郎画『絵本心の種』や高木貞武画『画本和歌浦』等の資料的価値の高い上方絵本が展示されました。絵による表現は文字

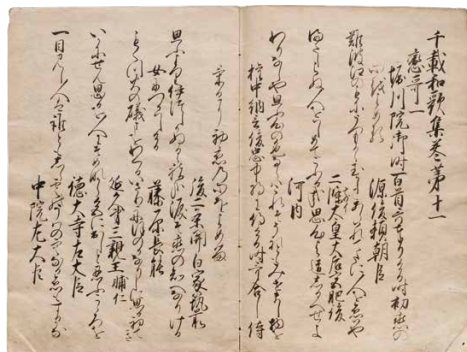


以上に読者の想像力を刺激し、鮮明な印象を与えます。内容をイメージするのに役立つため、絵本が幅広い読者層を獲得していったのも納得です。

第4部「コレクションの拡がり」では、朝鮮本や仏書、特徴的な墨流し表紙を持つ入江昌喜写『隆信集』、現存最古の『[宇津保物語]断簡』等のジャンルや形態の異なる様々な資料が展示されましたが、壮麗なひとつの資料群として見応えがあり、古典籍の多様さと松野文庫の蔵書の豊かさを堪能することができました。

松野文庫は国文研の「国書データベース」で全点の画像が公開されていますので、今回展覧が叶わなかった方々はぜひ利用してください。貴重な資料を保存し紹介するだけにとどまらず、今後はこれらの資料を研究資源として活用していくことが期待されます。

(和歌山大学教育学部准教授 長福 香菜)





## 展示を鑑賞して「賀茂季鷹と古典の「知」 京都市歴史資料館寄託山本家資料展」

江戸時代後期の上賀茂神社の社家であり国学者としても活躍した賀茂季鷹<sup>かものすえたか</sup>の旧蔵書群は、季鷹の後裔にあたる山本家の蔵書として現代まで守り伝えられてきました。「賀茂季鷹と古典の「知」」展は、現在、京都市歴史資料館に寄託されているこの山本家資料の名品を同館で展示紹介する展覧会です。京都産業大学教授小林一彦先生を研究代表者とするグループによって2022年から研究が続けられてきました（筆者もメンバーの一人）。

第1部の展示は、山本家資料の来歴を示す書物、及び国学研究の基礎となる源氏物語や平安鎌倉期歌人の私家集群です。ここでは初めに、本展覧会の目玉となる「清輔本片仮名古今和歌集」（重要文化財、写真下）が置かれました。藤原清輔筆本として珍重されてきたこの古今集は、厚みのある大本という物理的なボリュームと、片仮名書きの古今集というビジュアルで、圧倒的な存在感を湛えています。現在は清輔筆説は否定されていますが、そうした伝承と共に現代まで大事に守り伝えられてきたという事実は、科学的正しさのみでは語れない、人々が文学と歩んできた道のりをありのままに見せてくれます。

第1部に引き続き、第2部でも万葉集や竹取物語といった古典作品の展示を通して、季鷹がいかに精力的に書籍を蒐集し、それらを用いて国学研究に勤しんだかを紹介します。展示スペースに所狭しと展示された書物の多くには、季鷹による書き入れが余白狭しと書き付けられています。本文の校合や自身の解釈を書き

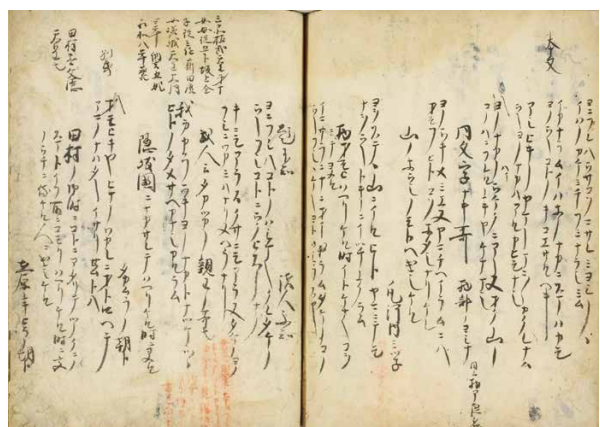
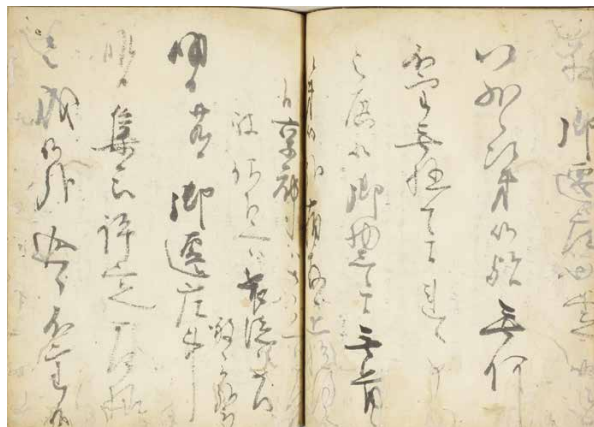


付けていく季鷹の姿を彷彿させます。

第3部では季鷹の社家としての活動や交友関係に関する資料が並べられ、地域資料研究としての成果が示されて展示は終了します。

今回の展示では、国学者の旧蔵書ということもあり、図版や彩色を用いた「動的」な資料ではなく、本文や書き入れが大きな意味を持つ「静的」な資料が多くありました。それならば、たとえば書き入れの内容や意義に迫るような解説があっても良かったのかも知れません。モノそれ自体の面白さと共に、研究者が日頃からせっせと読み解いているテキストの魅力をも展示の中から伝えることはできないものか。反省を込めつつ、次の課題として取り組みたいポイントです。

（同志社大学文学部国文学科助教 大山 和哉）





## 展示を鑑賞して「枕草子と春曙文庫―田中重太郎旧蔵書資料を中心に」

相愛大学所蔵の「春曙文庫」は、同大学教授を務め、生涯を枕草子研究に捧げた田中重太郎のコレクションです。貴重な枕草子関連資料が、初めて「逢坂の関を越えて」国文学研究資料館で展示されました。同時に、相愛大学副学長千葉真也先生を代表として、関連分野の研究者により2022年度より進められてきた研究の総決算としても意義深い展示です。

第1部は田中の研究業績や人々との交流を振り返るセクションとなっており、それを背景に、第2部では枕草子及び注釈書の貴重な諸伝本が惜しげもなく並べられます。枕草子伝本は江戸期書写のものを中心としており、伝小野於通筆本や宗祇拔書とされる本などからは、本文享受の道程を考えさせられます。あるいは、古写本が極めて少ないという伝能因所持本の一本で、田中が国文学者吉田幸一から借り受けていた際に火災に遭いながらろうじて焼け残ったという「富岡家旧蔵能因本枕草子」や、歌人・蔵書家の岡田真が所持していた一三行古活字本で、かつて田中に貸与され、のちに売目録に載せられていたものを田中が発見し入手したという「清少納言枕双帋」など、本と人をめぐるエピソードを通して、田中の研究に対する情熱と、それに伴う苦労のほどがしのべれます。これらのエッセンスが積み重なって『校本枕冊子』『枕冊子全注釈』といった労作に結晶したのです。

第3部・第4部では、『枕草子』の影響下に成った『犬枕』等のパロディ作品や、清少納言にまつわる説話の展開を、絵入本を取り入れながら紹介。あわせて、清少納言を描いた絵画、とりわけ簾を巻き上げて雪を眺



める「香炉峰の雪」で知られる場面が絵画化された作品も複数展示され、様々な清少納言のイメージが示されていました。こちらは国文学研究になじみのない一般の方々の目を楽しませたことでしょう。ミーハーな私としては、芥川龍之介が鍔金家香取秀真からの問い合わせに応じて「花瓶」の語の用例を『枕草子』に探したことを示す「香取秀真宛芥川龍之介書簡」が興味を引きました。

第5部は春曙文庫及び田中の門下生柿谷雄三の旧蔵書から、枕草子以外の著名な古典作品を中心とした優品紹介のゾーンとなっています。解説では本文系統、筆跡、古筆切などの話題に及び、玄人向けといった印象です。

本展覧会を見た研究者ならば、田中重太郎という人物の資料収集の手腕や研究の層の厚さに改めて畏敬の念を抱くことでしょう。一方で、枕草子本文への言及は解説の中にも多くはなく、学生時代に学んだ枕草子の世界、平安王朝の雅びを求めて来られた一般の方々にとっては、やや難しかったかも知れません。春曙文庫の紹介が主意であることを理解はしつつ、研究成果の社会還元という見方からすると、さらに「非研究者フレンドリー」な展示でも良いのではないかと感じられました。

(同志社大学文学部国文学科助教 大山 和哉)

## 日本漢詩文の場とかたち ― 日本古典籍セミナー北京 2024 ―

2024年3月30日(土)に開催された第12回日本古典籍セミナー「日本漢詩文の場とかたち」(Zoom 開催、主催：国文学研究資料館、北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究中心)では、シアトル大学の堀川暢子先生による「尼門跡における漢詩文―大成聖安(1668-1712)の漢詩を例に」と、国文学研究資料館の山本嘉孝先生による「画譜・書画帖の装訂―物質性から日本漢詩文を考える」の、二つの講義が行われました。近世以降の日本漢詩文をめぐる両先生の講義は、前者が漢詩文の創作と交流の場に、後者が漢詩文の媒体に、それぞれ焦点を当てていると言えます。お2人の講義を拝聴した感想をあえて一語で表すなら、「多様性」という言葉が相応しいかもしれません。

堀川先生の講義「尼門跡における漢詩文」は、曇華院に入り住職となった大成聖安という皇女の出自を紹介し、その漢詩を取り上げ、さまざまな指摘をしています。大成聖安はその特殊な身分ゆえに、宮廷社会、仏教界、儒者圏と深い関わりを持っており、その交流圏の多様性がまず看取できるでしょう。そして、そのような文脈、状況に応じて多彩な表現を駆使し、幅広い漢詩制作を展開しています。例えば、仏道関係の詩「拙偈三章 証法に謝す(一)」と「仏成道」には、それぞれ「粉骨碎身も酬ゆるに足らず」と「瞿曇の面目 露堂堂たり」と、宋元や五山の禅僧の語録(『碧巖録』等)の文言を取り入れたり、下敷きにすることによって、一求道者または曇華院の住持としての心境を詠出しています。また、「宮中に花を見る」「螢」「清閑寺に遊び 雨に値ふ」など、身近な景物を詠じる際にも、リアルな心情を写すより、中晩唐詩や宋詩や五山詩の表現を利用して、中日両国の古典的な情緒を醸し出す、つまり擬古的詠法が使われています。なお、質疑応答では、「大成聖安は宮廷で和歌制作をしたことがあるか?」、「彼女の生母の身分は?」、「従来の女性高貴者を中心とする文学圏との違いは?」、「漢詩引用という技巧の名称はあったのか?」など、和漢にまたがる実に多面的・横断的な視点からディスカッションが行われました。私にとって一番大きな収穫は、大成聖安の詩に「孤平」(「仄仄仄平仄仄平」)という近体詩では避けるべき「詩病」が2回も見られるという事実でした。この「孤平」の現象が同時代の近衛家熙の漢詩にもたまたま見られることは、質疑応答で他の聴講者から補足があり、とて

も勉強になりました。おかげで、私の研究分野である平安朝の漢詩における「孤平」の問題を考え直すまたとない契機になりました。

一方、山本先生の講義「画譜・書画帖の装訂」は、その副題「物質性から日本漢詩文を考える」が示す通り、近世・明治期に漢詩文の受容と制作がどのような媒体を通じて行われていたのかについて、物質的な観点から分析しています。まず線装本、金石、掛け軸、屏風、扇子(扇面)、詩箋、法帖など、実に多種多様な漢詩文の媒体が紹介されました。次には本講義の主題となる「画譜」(絵の模写を集めて観賞するもの)と「書画帖」(複数の詩人や画家の作品を集めて観賞するもの)の装訂の仕方、つまりどのように綴じられ、まとめられているかについて画像や動画を通じて分かりやすい説明がありました。画譜も書画帖も絵のある書物ですが、その絵に用いる紙を解体すれば見開き1枚という事実が、文字だけの漢詩文の写本や刊本に触れてきた私にとっては、まさに目から鱗で、興味深く拝聴しました。画譜について特に印象深かったのは次の2点です。①画譜そのものが、絵の模写をするのに使う粉本とは違い、最初から出版を意識して作られたものという点。②漢詩句を有する画譜は、絵画の趣旨を述べたりする題画詩とは違い、先行する詩句を具象化するための絵画であったりするという点。また、書画帖について強い印象を受けたのは、著名な詩人や画家が作品を残すことの社会的意義です。漢詩や絵画が1冊の書画帖に寄せ集められるということは、詩人に漢詩文を書いてもらう必要があるわけで、そこに漢詩文の弛みない生成を促す書画帖の機能があったのだと感慨を新たにしました。

今回のセミナーは、私にとって学問的視野が大いに広げられ、収穫がとても大きいものでした。近世以降の日本漢詩文が、未曾有の発展を遂げ、その制作や受容の規模もそれ以前とは比較にならないことは知識として知ってはいました。ですが、いざこのような文学史的内容を「場」と「かたち」を通じて具体的に示されると、王朝漢詩文をもっぱら研究してきた私のような研究者は、近世以降、漢詩文が貴族のみならず、一般の知識人の間でもこれほど身近で自然な存在となっていたのかと、やはり深く感銘を受けたのでした。(厦門大学外文学院日本語日本文学科准教授 廖 榮発)

## 古典籍講習会参加の記

2024年7月2日(火)・3日(水)に、「第7回若手研究者を対象とした日本古典籍講習会」が開催されました。若手研究者(大学院在籍者又は大学院修了後5年以内の研究者)が、古典籍の取り扱いに必要な知識を習得するために行われる、連続講義形式の講習会です。内容は、古典籍の概要説明から、くずし字、写本、版本、蔵書印、装丁、料紙、表紙の紋様、出版文化にまで至ります。

本講習会の最大の特徴は、講義の中で、古典籍の原本を拝見できる点です。本講習会は、全国各地の日本の古典籍を所蔵する機関の職員を対象とした「第22回日本古典籍講習会」のカリキュラムにも組み込まれているため、大人数の参加者がいます。しかし、国文学研究資料館所蔵や講師所蔵の本をたくさん準備いただいておりますので、閲覧しながら質問ができる時間も設けられているので、参加者皆がじっくりと原本に向き合えました。

さらに1階展示室で展示「和書のさまざま」(会期: 2024年4月18日(木)～8月9日(金))も併せて観覧することで、講座で取り上げられた古典籍の類例に

触れられました。国文学研究資料館編『本 かたちと文化 古典籍・近代文献の見方・楽しみ方』(勉誠社、2024年)が本年出版され、過去回の本講座を振り返るようになったことも学習の一助となりました。

受講前後を比較すると、古典籍を取り扱う際に得られる情報が、大きく増加したと感じます。特に版本について、内容の読み取りにしか意識を十分に向けられていなかったことに気づかされました。表紙や蔵書印などに特化した説明をうかがったことで、テキストだけでなく、本そのものに関心をもち、先人が本を残してきた営みに漸く思い至ることができるようになりました。

また、国文学研究資料館の書庫や、資料を館内に受け入れてデータベースに掲載するプロセスの一端も実見できました。莫大な情報を搭載している国文学研究資料館のデータベースが更新されている現場は、大変興味深いものでした。講座を受けるうちに参加者同士も次第に打ち解け、日々の研究について親しく話し合うことができ、非常に貴重な時間を過ごせたと感じております。(総合研究大学院大学日本文学研究コース 水嶋 彩乃)

## こども霞が関見学デー

令和6年8月7日(水)・8日(木)の2日間、文部科学省で開催された「こども霞が関見学デー」に出展しました。「こども霞が関見学デー」は、霞が関の各府省庁等が連携し、業務の説明や関連の展示を通じて、夏休み期間中に親子でふれあいながら社会や政策について学ぶイベントです。国文学研究資料館は、館の様々な取り組みや電子展示などを紹介するほかに、複製本を利用した古典籍の閲覧と、近世期版本をスマート顕微鏡で観察する紙質分析を体験できる場を提供しました。

複製本については、卷子本や樹形本等のさまざまな書型の資料について、内容の説明を受けながら、実際に手で開き、眺め、閉じるという一連の体験をしてもらいました。巻物に触れるのは初めてという子どもたちは、緊張の面持ちで慎重に、あるいは、忍者気分の華麗な手さばきで、鳥獣戯画絵巻の閲覧体験をしていました。

スマート顕微鏡での観察については、個人蔵の近世期板本を試料としました。複製本に比べると、時代の下った、格式の低い書型で、保存状態も良好とはいえ

ない資料での観察でしたが、かえってそこからホンモノらしさを感じた様子でした。子どもたちが手擦れ部分や墨汚れ、毛髪の漉き込み部分などの複製本にはない特徴を見つけては、「見て見て。これ、髪の毛!」などと、興奮気味に保護者に報告する様子が多く見られました。その情報が文学研究(国語の勉強的なもの)に必要なと説明すると、小さい子どもたちは「変なのー」と笑い、中学生は学校で話題にされる「文理融合」の実践例として理解した様子でした。

古典が「科目」になる前のこのような体験が、将来の古典への興味や親近感に繋がることを願っています。(松原 哲子)





## 国文学研究資料館・富岡町協定締結1周年

企画展「江戸の商いとくらし」・講演会「和歌と境界—<sup>なごそ</sup>勿来の関のことなど—」

福島県富岡町<sup>とみおかまち</sup>の歴史博物館「とみおかアーカイブ・ミュージアム」は令和6年7月から9月にかけて、国文学研究資料館・富岡町協定締結1周年企画展「江戸の商いとくらし」を開催。来場者が貨幣制や文書社会の成熟など近世社会の特質や江戸庶民の暮らしについて学びました。

企画展では、会期を前後半に分け、国文研所蔵史料63点とミュージアム所蔵資料約10点を展示。「商いと銭」「書く」「身につける」「喫し愉しむ」「建てる」「治す」の6テーマで近世社会や江戸に生きた人びとの暮らしぶりなどを紹介しました。特に、江戸の人びとのライフスタイルの細分化・多様化と不可分のテーマとして、信用通貨として成熟した貨幣制度と文書行政の拡大・深化などへの理解を促す展示となりました。

展示中央には『江戸名所図会』『商売往来絵字引』などを並べ、近世後期の人びとの江戸理解や遊山の楽しみ、商家の主と奉公人の関係などについても言及。壁面には『江戸名所図会』を大判に拡大した写真とともに、江戸庶民の1～2割ともされた大工の解説や、江

戸期には既に完成されていたともいえる大工諸道具の紹介、大高檀紙<sup>おたかたん</sup>・奉書紙<sup>ほうしよがみ</sup>のハンズオン展示、鼈甲<sup>べつこう</sup>など



でできた髪飾りなど多彩な展示がお目見え。5000人を超える来場者を楽しませました。



富岡町図書館は8月18日(日)、富岡町文化交流センターで渡部泰明館長の講演会「和歌と境界—<sup>なごそ</sup>勿来の関のことなど—」を企画展に合わせて開催。渡部館長は富岡と文化圏の近い勿来の関が和歌の表現にいかに使われたかなどを分かりやすく解説しました。講演会は福島県内のメディアにも複数取り上げられ、反響の大きい催しとなりました。

(とみおかアーカイブ・ミュージアム学芸員 門馬 健)

## 2024年度アーカイブズ・カレッジ（短期コース）・

## シンポジウム「地域資料の所在把握・救出・自治体史編纂・活用」

2024年11月11日(月)～16日(土)にかけて、長野県の長野県立歴史館・千曲市屋代公民館を会場として2024年度アーカイブズ・カレッジ(短期コース)を開催しました。今回のアーカイブズ・カレッジでもクラウドファンディングでの支援で開催することができ、自治体職員や学芸員、資料保全団体、大学院生など51名が参加しました。5日目の「地域とアーカイブズ」「アーカイブズの管理と利用」及び長野県立歴史館の施設見学では、長野県内のアーカイブズの動向や長野県立歴史館における活動について、村石正行学芸員に詳細な講義がありました。



11月17日(日)には長野県立歴史館講堂においてシンポジウム「地域資料の所在把握・救出・自治体史編纂・活用」を開催しました。報告者は、第1報告は山田淳平氏(奈良県文化財課主査)「奈良県における古文書所在確認調査—地域資料の現状—」、第2報告は土屋明日香氏(山形文化遺産防災ネットワーク世話人)「地域の文化遺産を災害から守る—山形文化遺産防災ネット

ワークの取り組み—」、第3報告は渡部恵一氏(八王子市市民部元八王子地域事務所加住事務所主査)「八王



子市の市史編さん事業」、第4報告は円城寺健悠(別府大学大学院 文学研究科史学・文化財学専攻アーカイブズ学領域博士前期課程2年)「歴史資料の活用と地域住民への共有—大分県別府市での活動を通して—」です。以上の報告を受けて原田和彦(長野市立博物館専門員)にコメントを頂きました。

今回のシンポジウムでは地域資料の散逸や災害被害が多く見られる中、各地で実践的な活動をしている方がたがご報告をしました。当日の会場参加者は42名、YouTube 視聴者は466名でした。ご参加した皆様、誠にありがとうございました。(西村 慎太郎)

## 第17回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。2024年で第17回を迎えます。受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です(3名以内)。

今回は、2023年1月～12月までの著書を対象とし、選考委員会における選考の結果、1名の受賞者が決定いたしました。授賞式は、11月2日(土)に当館大会議室で執り行われ、入口副委員長から選考経過報告、講評、そして、受賞者に賞状と副賞が授与され、当館の渡部館長からお祝いの言葉が贈られました。

これまでの受賞者・選考講評などの情報は、  
当館ウェブサイト日本古典文学学術賞ページを御覧ください。  
<https://www.nijl.ac.jp/outline/gakujyutusu.html>

### ■第17回日本古典文学学術賞受賞者

河村 瑛子

(京都大学大学院文学研究科 准教授)

研究業績：『古俳諧研究』和泉書院



### ■第17回日本古典文学学術賞 選考委員会委員

品田 悦一 (上代文学会／元東京大学大学院教授)

竹内 正彦 (中古文学会／國學院大學教授)

小秋元 段 (中世文学会／法政大学教授)

久保田啓一 (日本近世文学会／広島大学教授) ※委員長

久保木秀夫 (和歌文学会／日本大学教授)

入口 敦志 (国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長・同館副館長)

岡崎真紀子 (国文学研究資料館教授)

## 第17回日本古典文学学術賞選考講評

### 河村瑛子氏『古俳諧研究』(和泉書院、2023年5月30日刊)

古俳諧に関する文献の博搜と整理、その基盤の上に立った作品の解釈が精緻に行われ両立していることが本書の特徴であり、優れた点である。本書は、西鶴、芭蕉以前の古俳諧を見直すための基盤となる著書となっていて、今後本書を抜きにして古俳諧、ひいては俳諧史の研究はありえないと言っても過言ではないであろう。

全体の約半分の頁を占める第4部「古俳諧年表稿」は労作である。元和から天和三年まで約70年間の889点もの俳書につき、年代順に配置したもの。しかし、その記述は単なる年表ではなく、膨大な資料の博搜に基づく書誌情報や解題が付されており、むしろ〈古俳書辞典〉とも言うべきものになっている。更には、〈書名索引〉と〈人名索引〉が備わり、利便性にも十分配慮されている。

その資料面での精査の上に、第3部古俳書研究が成立する。資料の翻刻と諸本研究を主とするものであるが、単なる書誌的な整理にとどまらない成果を見せる。例えば、第1章「貞徳作「壺の名に」独吟百韻の諸本について」では、諸本間の異同からうかがえる貞徳の改稿過程を丁寧に読み解き、貞徳の創作のありかたの一端を明らかにするなど、文学研究としての側面も高く評価できる。

上記で明らかのように、古俳諧書に関する書誌的事

項と研究史を網羅的かつ緻密に集積した確かな基盤を構築し、その基盤の上に、第1部「資料としての古俳諧」での言葉の考証が行われる。その注釈は、『俳諧類船集』などの古俳書に軸を置きながらも、古代から近世に至る文学史全般、更には文化史や民俗学などへの多角的な視点と提言を含み、古俳諧研究枠を大きく越えた拡がりを持つ。「ものいふ」(第1章)「やさし」(第3章)など、ごく普通に使われる基本語彙をとりあげて再定義を行うなど、従来の研究成果を更新するような指摘が見られることは、特筆すべきであろう。

そのことは第2部も同様であり、研究の層の厚い芭蕉の語彙に、新たな見解を加えていることも優れた点として評価できる。第3章「古俳諧の擬態語表現」では、古俳諧における擬態語使用の用例を精査し、その用法の転換点と当時の俳風の変化とを関連づけ、更には擬態語表現の研究への展望にもつなげるなど、注目すべき指摘や提言もある。

序章において提示される、資料整備の方法を見直した上で作品を味読し、古俳諧の文学史上の位置づけを再検討するという著者の目的は、十分に達している。

以上の評価により、選考委員会は満場一致で河村瑛子氏に日本古典文学学術賞を授与することと決した。

(入口 敦志)

## 令和6年度（2024年度）「古典の日」講演会

令和6年（2024）11月2日（土）、国文学研究資料館主催の「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」（11月1日）は、国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年（2012）に定められました。『源氏物語』に関わる最古の記録が寛弘5年（1008）11月1日であることに由来しています。当館も「古典の日」の趣旨に賛同し、毎年、各分野の第一線で活躍されている方々を講師にお迎えし、日本古典文学に関わる様々なご講演を賜っております。

今年は、平安文学、特に『源氏物語』研究がご専門の中西智子氏（当館准教授）と、アニメーション監督の片渕須直氏（日本大学芸術学部特任教授・上席研究員）のお二方をお招きし、貴重なお話を伺いました。なお、今回ははじめて「日本古典文学学術賞」授賞式（国文学研究資料館賛助会主催）と同日開催となりました。

渡部泰明館長のご挨拶の後、まずは中西氏より「『枕草子』と『源氏物語』—かな散文のポエジー—」と題してお話がありました。はじめに「【一】ポエジーのありか—ジャンルを超えて偏在するもの—」として、宮沢賢治の詩などを例に「ポエジーとは何か」が丁寧に説明されました。「ポエジー（詩情）があるからこそ、読み手は自分が読んでいる文学作品の世界へ没入することができる」というご説明には、多くの聴講者が深く頷いていました。「【二】『枕草子』のポエジー」では、近代以降、『枕草子』が「散文詩的である」と評価されてきたことが紹介され、その理由として『枕草子』特有の〈列挙するという手法〉や、和歌の修辞法の一つである「見立て」（あるものを別のものに言い換えて表現する技法）が地の文すなわち散文に用いられているといった〈“うた”との近さ／遠さ〉が挙げられました。最後に、「【三】『源氏物語』のポエジー」では、『源氏物語』は地の文の中に和歌的要素が調和して完成形態を示していると結論づけられました。

続いて、片渕氏より「女房・清少納言の同僚たち」と題して、ご講演いただきました。片渕氏には『この世界の片隅に』や『この世界の（さらにいくつもの）片隅に』など、数多くの代表作があります。その作風の特徴は、膨大な史料から「その時代とその土地」を実証的に描き出す点にあります。実際、『この世界の片隅に』は、戦争を体験した世代の間で「当時の空気をもっ



ともよく描き出している」と話題になりました。

ご講演の冒頭で、現在制作中の『つるばみ色のなぎ子たち』のプロットフィルムが流されました。この映画では、疫病などが蔓延した清少納言の時代が舞台になっています。そもそも片渕氏が清少納言に関心を持たれたのは、2009年公開の『マイマイ新子と千年の魔法』の制作時に遡ります。山口県の国司の館の発掘現場を見学された際、「幼いころの清少納言もここを走っていたのかも」と想像し、清少納言が身近な存在に感じられたそうです。

そして、『つるばみ色のなぎ子たち』の制作にあたり、清少納言の同僚が分らないと、清少納言を描けないと思い至ったそうです。そこで、『枕草子』や『大日本史料』はもちろん、『小右記』などの古記録類、また『後拾遺集』や『実方集』などの歌集類なども幅広く丹念に読み込まれ、清少納言の同僚たちの人物像や生涯を詳細に調査されました。これにより、『枕草子』に描かれていない同僚女房たちの人生のディテールまでもが浮かび上がってきました。緻密な調査に基づいた『つるばみ色のなぎ子たち』の公開が待たれます。

（河田 翔子）



## 総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況

### ■「第59回 明治古典会 七夕古書大入札会」に参加

日本文学研究コースの教育研究プロジェクト「教員及び学生による日本文学及び周辺領域に関する研究」に基づき、7月5日（金）、先生方とともに「第59回 明治古典会 七夕古書大入札会」に参加しました。

「明治古典会 七夕古書大入札会」は、専門古書店からなる明治古典会が主催する、江戸から現代までの古書や美術品などを扱う入札会です。今回の入札会では、古今東西の美術や文学作品などが出品され、特に明治から昭和初期にかけての作品が多くありました。学内で普段関わる機会が少ない近代文学専門の先生方とも交流ができ、著名作家の書簡や立派な初版本、検閲された出版物などについて学ぶ機会となりました。また、近代のものだけではなく、江戸時代の浮世絵や写本、刊本、幕末期の高札なども出品されており、とても興味深く感じました。

入札会ではこれらの貴重な資料に実際に触れることができ、大変勉強になったので、次回もぜひ参加したいと考えております。（Escalona Echaniz Jose Manuel）

### ■ SOKENDAI 研究派遣プログラムを利用した アメリカでの実地調査

本年8月にアメリカ合衆国所在の古筆手鑑の実地調査を行いました。古筆手鑑とは、多種多様のジャンル・時代の古筆切<sup>※1</sup>をアルバムのように貼り込んだ



調査風景（左、筆者。右、舟見一哉氏）

資料です。調査出張にあたり、本学の「SOKENDAI 研究派遣プログラム」<sup>※2</sup>に申請し、採択されました。

本調査の主な目的は、イェール大学バイネキ稀観本・手稿図書館所蔵の古筆手鑑の解題作成を軸に、古筆手鑑の入門・概説の図書を出版することにあります。現地調査に先立ち、Edward Kamens氏（Sumitomo Professor Emeritus of Japanese Studies, Yale University）・舟見一哉氏（実践女子大学准教授）と対面・オンラインによる度重なる打ち合わせを行いました。

現地調査では、デジタル画像からは得られない古筆切の寸法・字面の高さ・装訂・紙質の書誌データを集成するために、一葉一葉を丁寧かつ詳細に調査しました。調査同行者の舟見氏とは約10日間をともに行動し

ましたが、第一線でご活躍されている研究者が古筆手鑑を調査する際に、何を大事にして向き合っているのかを、目を見て、耳で聞くことができ、充実した調査となりました。

滞在中、調査の成果報告を含む研究集会「Tekagamijō Workshop : Recent Research and Publication Plans」（オンライン開催。2024年8月21日（水））を実施しました。本研究集会が、私にとって初めての英語による資料作成と発表とのチャレンジとなりました。研究集会には、アメリカの研究者・ライブラリアン・キュレーター・大学院生、およびこれまで本手鑑の調査に関わってこられた日本の研究者が参加し、ディスカッションの時間には活発かつ有益なやり取りが行われました。

大学院生として海外所在の資料調査を実施できたことや、海外で研究発表を行なったこと、図書出版の編集作業に関わっていることは、自身の研究者としての視野を広げるとともに、改めて原本資料を扱う研究は魅力的だと思える貴重な経験となりました。（瀧山 嵐）

- ※1 肉筆で書写された卷子本や冊子本等を切断・分割した断片資料。
- ※2 総研大の教育理念である「高い専門性」「広い視野」「国際的な通用性」を持つ研究者人材の育成を推進するため、海外での短期の研究活動や、将来のキャリア構築につながる国内外での長期の共同研究等に主体的に取り組む本学学生に対して必要な経費を支援するものです。

### ■ 2024年度入試説明会 対面及びオンラインで開催

10月4日（土）、日本文学研究コースでは入試説明会を開催し、計8名の参加がありました。

参加者はコースの特色や入試について説明を受けた後、在学生・修了生と懇談会を行いました。懇談会では研究環境について多くの質問が上がり、国文学研究資料館ならではの研究環境を利用した実際の学生生活を紹介しました。続いて参加者が希望する教員と個別に面談を行い、研究内容や今後の研究計画について話し合いました。最後は院士室などの施設見学があり、閲覧室では当コースの教育研究プロジェクトで購入した多彩な原本が展覧されました。参加者はそれらを手に取りながら教員・在学生の解説に耳を傾け、和やかなひとときとなりました。（齋藤 真麻理）



入試説明会の様子

## データ駆動による課題解決型人文学の創成～データ基盤の構築・活用による次世代型人文学研究の開拓～ KICKOFF SYMPOSIUM 「AI × 人文学—データ駆動による未来形成—」

文部科学省大規模学術フロンティア促進事業の一つとして、本年度（2024年度）から10年間の計画で標記のプロジェクト（略称：国文研 DDH プロジェクト）が始まりました。これは、2023年度までの10年間推進してきた「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（略称：歴史的典籍 NW 事業）の後継計画として採択されたもので、これまで蓄積してきた30万点に及ぶ古典籍のデジタル画像に基づき、さらなるデータの構築と課題解決を目指す新たな人文学研究の創成を目指すものです。それを記念して、12月1日に一橋記念講堂にてキックオフシンポジウムを開催しました。

冒頭で文部科学省研究振興局長の塩見みづ枝様からご挨拶をいただき、講演に入りました。渡部泰明館長が「AIは人文学の夢を見るか」と題して概要の説明と将来への夢を語るのを皮切りに、5人の講師の方の講演が続きしました。

近藤泰弘・青山学院大学名誉教授

「AIによる日本古典研究の方法」

日比谷潤子・国際基督教大学名誉教授・日本学術会議副会長

「AI × 人文学：これからの言語データ整備に向けて」

ミヒャエル キンスキー・

ゲーテ大学フランクフルト・アム・マイン日本学研究所教授

「欧州における DH の現状と展望 ドイツを中心に」

（ドイツからズームでの参加）

吉見俊哉・國學院大学まちづくり学部教授・東京大学名誉教授

「自己との対話：私はもうすぐ消えるのだろうか？」

喜連川優・情報システム研究機構長・東京大学特別教授

「悠久の人文学と rat year のデジタルは仲良しカップル？」

演題を見てもわかるとおり、各分野の専門の立場から、また人文学のみならず、異分野からの視点から示唆に富むお話を伺うことができました。

講演会の後、長めの休憩をとり、ご参加の方々にはロビーに展開された共同研究の成果等のポスター発表と企業のブースなどを、ゆっくりと御覧いただくことが出来ました。参加者同士の情報交換なども行われ、充実した時間になったと思います。

休憩の後は登壇者による討論です。ここでも、人文学の現状と課題、更にはデータサイエンスを用いた将来像など、相互に活発な議論が交わされました。

会場には80名の出席があり、また YouTube での同時配信は800

名以上の方に視聴していただき、関心の高さがうかがわれました。  
（入口 敦志）



## 表紙絵資料紹介

増山守正編輯『東京名勝画詞』（明治20年刊 当館蔵）

明治20年刊。丹波藩士出身の増山守正が東京府下の名勝31ヶ所を選び、それぞれ「好手」の画家の画と題詠による和歌・俳句・漢詩を併載した本。

縦26.5cm × 横18.1cm、大本というには少し小さいが、それでも大きな本である。増山が本書より前に出版した『東京名勝詩集』（明治15年序）は中本サイズだった

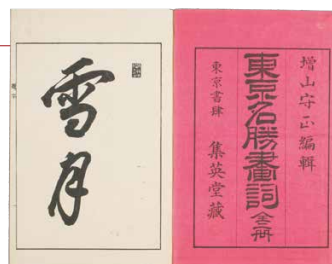
から、「画」と「詞」を収めるための大きな版面が選ばれたのだろう。編中の詩歌から題を削り本文だけを載せ、詩歌の記載順も優劣などの順ではなく「記者の便宜に従」う（例言）といったのどかな編集ぶり

も相まって、明治の東京めぐりにぴったりの、ゆとりある親しみやすい本が生まれた。明治23年に出た

続編と、明治24年の「補遺」も国書データベースで閲覧可能。続編には、増山と親交のあった大沼枕山の序がある。

掲出箇所は亀戸・梅屋敷の臥龍梅。「八十翁是真」すなわち柴田是真の画に、上杉敬齋（斎憲）の詩「煙雨 花を催して 春意 濃やかなり 古閑 曉に訪ぬ 一枝の筈 老根 屈曲して 蟠りて睡るが如し 満樹の香雲 臥龍を没す」をあわせる。「古閑」とあることからすると、詩の方は静岡の清見寺、清見閑の梅を接ぎ木した「臥龍梅」を詠んだもののようだが、まあ、そんなことは良いではありませんか。過ぎゆく時代への思いはいずれも同じ、画中の老人とともに春の香をよろこび文雅を楽しむ、そんな心で本年も過ごしたいものである。

（多田 蔵人）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.66

発行日 令和7（2025）年1月22日

編集 国文学研究資料館 社会連携部

製作 株式会社トリッド

©人間文化研究機構国文学研究資料館